

『父のインク壺』 秋山和子



令和元年12月 校書房刊

微笑む母の写真の横には、第一歌集『父のインク壺』が飾ってあります。三回忌を迎え、母が歌集出版に向けて奮闘していた日々は遠い昔のように感じます。

歌集選歌中に病が発覚し、歌集出版は生きた証を遺す最期の大事な事となりました。急遽渡された紹介状を手に駆け込んだ先で「即入院」と言われるも、「原稿を書きなきゃ」と、断って帰ってきたこともありました。

目標が第一歌集出版から合同出版記念会出席となった頃、コロナ禍で開催延期を知り、「歌集を出版できたから思い残すことはないわ」と言う姿は寂しそうにみえました。そんな母を励まし支えてくれたのは、みなさまからのあたたかいお言葉の数々でした。毎日のように届く手紙や葉書を、とてもうれしそうに、時には涙しながら拝見し、それは宝物のように大切にしておりました。

なにより、コスモスでの二十二年余は、母にとって本当に幸せでかけがえのないものとなりましたこと、みなさまに心より感謝申し上げます。
(秋山幸子)

——歌集の著者から——

『雪中遍路』 田中英在



令和元年12月 校書房刊

人は誰しもふと立ち止まり、人生の行く末を考える時があります。私も変わらず自分探しの旅に出かけました。それが四国遍路の旅や観音霊場巡りの旅です。

今も尚、川土手に菜の花が咲く春ともなるとなぜか落ち着かぬ私です。その旅を「報恩感謝の旅」と題して記録した七千首を超える短歌日誌より森重香代子氏に選をいただいたのが『雪中遍路』なる私の第一歌集です。

同年十二月、四国霊場巡礼の先達を公認されました。明けて令和二年コロナ禍となり、四国霊場の札所は閉鎖され先達のデビューは叶わなくなりました。そこで長年蓄積した遍路の短歌日誌を再編集し、アルバムを添えて道中手引きとして仲間に配付しました。仲間は私を紙上先達と呼びラインをしてきます。今流行のリモート遍路です。手作りの「報恩感謝の旅」の短歌日誌とアルバムが思わず好評で鼻高です。最近では「コロナ禍の四季」という集名のアルバム風短歌日誌を編集し早朝ウォークの仲間と老後の呆け封じを楽しんでいます。

『白蝶貝』 久保田智栄子



令和2年1月 柘書房刊

以前、「地球そっくりな星を発見」との記事が新聞に掲載された。単純なわたしは「地球そっくりな星ならば、そこにはこの地球に存在するわたしとそっくりな、ずばらで呑気で心配性で食いしん坊な生物がいて、同じような失敗をしているに違いない」と思った。

もうひとりわたしがあてもおそらくは同じ人生歩む気がする

歌集に入れた自嘲の一首である。ところが、私信などでこれを好きな歌として挙げてくださる方が何人もいて驚いた。ある方は、「私の変転きわまりない、何もなし得なかつた人生でも、ふり返ればとてもいとおしく、ああまた同じ人生であつてもいいなと思うのです」と書き添えておられた。その方の思いがけない深い受け止め方にわたしは狼狽し、自分の軽薄さを恥じた。でも、やっぱり、遠く離れた地球そっくりの星で日々をやり過ごしている、わたしそっくりの宇宙人に遭つて、互いの肩を叩き合いたい。

——歌集の著者から——

『羅漢の如く』 玉井多寿子



令和2年2月 柘書房刊

もう何年も前のことであるが「玉井さんは、何か事があつた時の歌がうまいね」と言つてくれた友人がいた。事があるとは、病気を体験したり、病人や死が周辺にあつて、立ち合つたりした時の状況を詠むことを差す。

私の歌は、新しい歌にはついてゆけず、ただ、生活の記録のような歌ばかりである。歌集用に選んでくれた歌も、そのような歌が多いと思う。新しい形式の（考え方も含め）の歌にはついてゆけず、人の心を打つような良い歌も詠めない。でも、やめたくもない。

そんな中で、私のこれからは、などと気張つて言えることは何もない。今後の人生で得た体験や、日々に湧く心情を、実直に表現してゆきたいと思う。下手でも、今まで生きた人世を、また今後の生きざまを、私のたしかな「足跡」として残して行きたい。

この頃、このような思いになっている。歌集を出したということもあるけれど、年齢のせいかもしれない。